

小児科臨床研修カリキュラム

【特徴】

小児科は単一臓器にかかわる専門科ではなく子ども全体を対象とする総合診療科である。疾患のみをみるのではなく全人的な観察姿勢が求められる。また当科は新生児から成人に至るまでの世代に関わる医療・保健を担っているため、小児期の成長・発達への理解や成育環境に対する配慮も必要である。当科の研修では、小児の発達と疾患に関する基礎的知識を学び、小児や新生児に対する一般的な診療技能を習得する。感染症や川崎病、けいれん性疾患など小児に特徴的な急性疾患のみならず、アレルギー・免疫疾患、神経疾患、循環器疾患、腎疾患、**血液疾患**、**先天異常**など慢性的な疾患の管理についても上級医の指導のもと経験する。当科は地域の小児の二次救急を担っており、研修医は当直医のもと副直医として小児救急医療を経験する。

I. 研修指導者

院長補佐

(兼) 主任科部長	米谷 昌彦	小児科医長	平田 量子
小児科部長	森沢 猛	小児科医長	中尻 智史
小児科部長	西山 敦史	小児科医長	山名 啓司
小児科部長	親里 嘉展	小児科医長	小寺 孝幸
小児科副部長	高寺 明弘	小児科医長	金川 温子
小児科医長	佐藤 有美	小児科医長	藤村 順也
小児科医長	阪田 美穂	小児科医長	松本 和徳
小児科医長	沖田 空	小児科医師	上村 和也
小児科医長	橋本 総子		

II. 週間スケジュール (例)

(一般小児科病棟)

	午 前	午 後	夜 間
月	病棟診察・処置※	病棟処置※、病棟カンファレンス	

火	7:30~症例検討会、 病棟診察・処置※	病棟処置※、循環器カンファレンス	当直補助
水	病棟診察・処置※、9:30~総回診	病棟処置※、心臓カテーテル	
木	8:00~抄読会、病棟診察・処置※	病棟処置※、病棟カンファレンス	ミニレクチャー
金	8:00~スタッフミーティング 病棟診察・処置※	若手勉強会、病棟処置※	
土・日	病棟診察・処置	(当直補助)	

(NICU・GCU)

	午 前	午 後	夜 間
月	病棟診察・処置※※ 輪読会、入院症例カンファレンス	病棟処置※※	
火	7:30~症例検討会、 8:30~病棟処置、神経カンファレンス	病棟処置※※、面談 循環器回診	当直補助
水	8:30~総回診、病棟処置※※	病棟処置※※、乳児健診、 16:00~母子カンファレンス(隔週)	
木	8:30~回診、病棟処置※※	病棟処置※※、予防接種	ミニレクチャー
金	8:00~スタッフミーティング 8:30~回診、病棟処置※※	病棟処置※※、面談	
土・日	病棟処置※※	(当直補助)	

※ …外来研修、救急外来研修等を含む

※※…ハイリスク分娩・帝王切開立ち合い、新生児搬送を含む

Ⅲ. 一般目標

小児科及び小児科医の役割を理解し、小児医療を適切に行うために必要な基礎知識・技能・態度を修得する。

1. 小児の特性の理解

- 1) 正常小児の成長・発達に関する知識が不可欠
- 2) 母親（保護者）の心理状態の理解、心配の在り方を受け止める対処法を学ぶ

2. 小児診療の特性を学ぶ

- 1) 対象年齢に応じた診療（乳幼児では自分で訴えない）
- 2) 理学所見の取り方の配慮

- 3) 小児薬用量の考え方、輸液量の計算法、検査正常値の違い
- 4) 予防医学—予防注射、マスキングについての知識

3. 小児期の疾患の特性を学ぶ

- 1) 発達段階によって疾患内容が異なる
- 2) 成人とは病態が異なる
- 3) 成人にはない小児特有の疾患（染色体異常症、先天性異常など）
- 4) ウイルス感染の多さ
- 5) 未熟児・新生児医療

IV. 行動目標

1. 病児 — 家族（母親） — 医師関係
2. チーム医療
3. 問題対応能力
4. 安全管理
5. 救急医療

V. 経験目標

1. 医療面接・指導

- 1) 小児ことに乳幼児に不安を与えないように接することができる
- 2) 病児に痛いところ、気分の悪いところを示してもらすることができる
- 3) 保護者より診断に必要な情報、子供の状態、発育歴、予防接種歴などが聴取できる

2. 診察

- 1) 小児の身体計測、検温、血圧測定ができる
- 2) 小児の発達・発育に応じた特徴を理解できる
- 3) 小児の全身を観察し、正常な所見と異常な所見、緊急に対処が必要かどうかを把握して提示できる
- 4) 発疹を正確に観察・記載できる、また日常しばしば遭遇する発疹性疾患（麻疹、風疹、突発性発疹、溶連菌感染など）の特徴を鑑別できる
- 5) 下痢の便の性状、脱水症の有無を説明できる
- 6) 嘔吐や腹痛のある児では、腹部所見を描出し、病態を説明できる
- 7) 咳の出かた、咳の性質、呼吸困難の有無とその判断を修得
- 8) 痙攣を診断できる
- 9) 理学的所見により、胸部所見、腹部所見、頭頸部所見、四肢の所見を的確に行い、

記載ができるようになる

- 10) 小児疾患の理解に必要な症状と所見を正しく捉え、理解するための基本的知識を修得し主症状及び救急の状態に対処できる能力を身につける

3. 臨床検査

- 1) 一般尿検査（尿沈査顕微鏡検査を含む）
- 2) 便検査（潜血、虫卵検査）
- 3) 血算・白血球分画
- 4) 血液型判定・交差適合試験
- 5) 血液生化学検査
- 6) 血清免疫学的検査
- 7) 細菌培養・感受性試験
- 8) 髄液検査（計算板による髄液算定を含む）
- 9) 心電図・心超音波検査・心臓カテーテル検査
- 10) 脳波検査・頭部 CT スキャン・頭部 MRI
- 11) 単純 X 線検査・造影 X 線検査
- 12) CT スキャン・MRI 検査
- 13) 呼吸機能検査、気管支ファーマー

4. 基本的手技

A. 必ず経験すべき項目

- 1) 乳幼児を含む小児の採血、皮下注射ができる
- 2) 新生児・乳幼児を含む小児の静脈注射・点滴静注ができる
- 3) 輸液・輸血及びその管理ができる
- 4) 新生児の光線療法の必要性の判断指示ができる
- 5) パルスオキシメーターを装着できる
- 6) 浣腸ができる
- 7) 胃洗浄ができる

B. 経験すべきことが望ましい項目

- 1) 指導者のもとで導尿ができる
- 2) 指導者のもとで注腸・高圧浣腸ができる
- 3) 指導者のもとで腰椎穿刺ができる

5. 薬物療法

小児に用いる薬剤の知識と使用法、小児薬用量の計算方法を身に付ける

- 1) 小児の体重別・体表面積別の薬用量を理解し、それに基づいて一般薬剤の処

方箋・指示書の作成ができる

- 2) 剤型に種類と使用法が理解できる
- 3) 乳幼児に対する薬剤の服用法、剤型ごとの使用法について、看護師に指示し、保護者に説明できる
- 4) 年齢・疾患に応じて輸液の適応を確定でき、輸液の種類、必要量を定めることができる

6. 成長発育に関する知識の修得と経験すべき症候・病態・疾患

A. 成長・発育と小児保健に拘わる項目

- 1) 母乳,調整乳,離乳食と知識と指導
- 2) 乳幼児期の体重・身長増加と異常の発見
予防接種の種類と実施方法及び副反応の知識と対処法の理解
- 4) 発育に伴う体液生理の変化と電解質・酸塩基平衡に関する知識
- 5) 神経発達の評価と異常の検出
- 6) 育児に拘わる相談の受け手としての知識の修得

B. 一般症候

- 1) 体重増加不良、哺乳力低下
- 2) 発達の遅れ
- 3) 発熱
- 4) 脱水、浮腫
- 5) 発疹、湿疹
- 6) 黄疸
- 7) チアノーゼ
- 8) 貧血
- 9) 紫斑、出血傾向
- 10) 痙攣、意識障害
- 11) 頭痛
- 12) 耳痛
- 13) 咽頭痛、口腔内の痛み
- 14) 咳・喘鳴、呼吸困難
- 15) 頸部腫瘤、リンパ節腫脹
- 16) 鼻出血
- 17) 便秘、下痢、血便
- 18) 腹痛、嘔吐
- 19) 四肢の疼痛
- 20) 夜尿、頻尿
- 21) 肥満、やせ

C. 頻度の高い、あるいは重要な疾患

(A: 必ず経験すべき疾患 B: 経験することが望ましい疾患)

1) 新生児疾患

- (1) 低出生体重児 (A)
- (2) 新生児黄疸 (A)
- (3) 呼吸窮迫症候群 (B)

2) 乳児疾患

- (1) おむつかぶれ (A)
- (2) 乳児湿疹 (A)
- (3) 染色体異常症 (B)
- (4) 乳児下痢症、白色下痢症 (A)

3) 感染症

- (1) 発疹性ウイルス感染症 (A)
麻疹、風疹、水痘、突発性発疹、伝染性紅斑、手足口病
- (2) その他のウイルス疾患 (A)
流行性耳下腺炎、ヘルパンギーナ、インフルエンザ
- (3) 伝染性膿痂疹 (とびひ) (A)
- (4) 細菌性胃腸炎 (B)
- (5) 扁桃炎、気管支炎、細気管支炎、肺炎 (A)

4) アレルギー性疾患

- (1) 気管支喘息 (A)
- (2) アトピー性皮膚炎、蕁麻疹 (A)
- (3) 食物アレルギー (A)

5) 神経疾患

- (1) てんかん (A)
- (2) 熱性痙攣 (A)
- (3) 細菌性髄膜炎、脳炎・脳症 (B)
- (4) ウイルス性髄膜炎 (A)

6) 腎疾患

- (1) 尿路感染症 (A)
- (2) ネフローゼ症候群 (B)
- (3) 急性腎炎 (B)

7) 循環器疾患

- (1) 先天性心疾患 (A)
- (2) 心不全 (B)
- (3) 不整脈 (B)

- 8) 膠原病など
 - (1)川崎病 (A)
- 9) 血液・悪性腫瘍
 - (1)貧血 (A)
 - (2)小児ガン、白血病 (B)
 - (3)血小板減少症、紫斑病 (A)
- 10) 内分泌・代謝疾患
 - (1)糖尿病 (B)
 - (2)甲状腺機能低下症 (B)
 - (3)低身長・肥満 (A)
- 11) 発達障害・心身医学
 - (1)精神運動発達遅滞、言葉の遅れ (B)
 - (2)学習障害 (B)

7. 小児の救急医療

小児に多い救急疾患の基本的知識と手技を身につける

(A: 必ず経験すべき疾患 B: 経験することが望ましい疾患)

- 1)脱水症の程度を判断でき応急処置ができる (A)
- 2)喘息発作の重症度判定、中等症以下の病児の応急処置ができる (A)
- 3)痙攣の鑑別診断と、応急処置ができる (A)
- 4)腸重積を正しく診断して適切な処置ができる (A)
- 5)虫垂炎の診断と外科へのコンサルテーションができる (B)
- 6)気道確保、人工呼吸、胸骨圧迫、静脈確保、骨髄針留置、動脈ラインの確保などの蘇生が行える (B)
- 7)急性喉頭炎、クループ症候群 (A)
- 8)アナフィラキシー・ショック (B)
- 9)異物誤飲、誤嚥 (A)